

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 21 日現在

機関番号：25501

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20330073

研究課題名（和文） 寛永通寶の生産と流通——東アジア銭貨の共時性を視座に——

研究課題名（英文） The production and circulation of *Kan'ei Tsuhō*  
Considering the interconnectedness of coinage activity in East Asia

研究代表者

櫻木 晋一（SAKURAKI SHINICHI）

下関市立大学・経済学部・教授

研究者番号：00259681

研究成果の概要（和文）：17 世紀という近世前期に対象時期を絞った研究を実施した。福岡県黒崎鑄銭場遺跡の発見とその調査研究により、17 世紀初頭には寛永通寶へつながる近世銭貨生産の技術や体制が出来上がっていたことを明らかにできた。ベトナム、沿海州・サハリン、インドネシアなどの出土寛永通寶を調査・データ化したことによって、これらの地域では相当数の日本貨幣が存在・流通していたことを確認できた。一連の調査結果から見えてくる東アジア規模での銭貨動態は、15 世紀後半に中国からの銭貨流入が鈍ったため、ベトナムでは自国の銭貨が発行され流通する。それに伴って私鑄銭も横行し、貨幣経済の浸透とともに通貨使用が混乱し、15 世紀末以降はベトナムでも撰銭がおこなわれ、中国や日本での撰銭現象と共時性をもっていたと考えられる。16 世紀になると日本での出土例から、わずかながらベトナム銭貨の流入を確認できる。それが 17 世紀になると、逆方向に日本から中国・ベトナムへと銭貨が移動することが、東南アジアにおける寛永通寶・長崎貿易銭の出土例から明らかとなった。また、サハリンでは、相当数の銭貨が装飾品など経済外的な目的で使用されたことを確認できた。文献史学の成果としては、黒崎鑄銭場の関連史料を発見したこと、小倉藩初期の鑄銭の実態を細川家文書などから究明したこと、山田羽書の生産管理体制を明らかにできた。また、海外の研究諸機関に所蔵されている日本貨幣の調査を実施し、データベースを作成した。大英博物館所蔵貨幣カタログを英国で出版し、研究成果を国際学会で報告したことにより、英語圏の人々に対して日本貨幣史の研究実態を知らしめることができた。金属学的技術では、初期の寛永通寶はヒ素銅が使用されており、これは日本の近世初期の銭貨生産に特徴的なことであることを明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：This research focused on the *Kinsei* period which date from the 17th century. Our findings from the *Kurosaki* mint ruins suggest that technology utilised at that time led to the introduction of *Kan'ei Tsuhō*. Through the collection of survey data related to *Kan'ei Tsuhō*, along with the analysis of information on coins excavated in areas including Vietnam, the maritime provinces of Siberia, Sakhalin, and Indonesia, we have been able to confirm that a significant numbers of Japanese coins were in circulation in these areas. In relation to coin movement in East Asia, our results show that the flow of coins from China began to decrease in the second half of the 15th century. At this time, domestically minted coins were in use in Vietnam, along with privately-minted or forged coins. This led to a disruption of the currency flow. As a consequence, the end of the 15th century saw the introduction in Vietnam of an *erizeni* act aimed at prohibiting the acceptance of low-quality coins. This mirrored contemporary policy in China and Japan. Findings from excavations in Japan show that Vietnamese coins were being brought into the country in the 16th century. Conversely, the discovery of *Kan'ei Tsuhō* and *Nagasaki Boeki-sen* in Southeast Asia points to the movement of coins from Japan to China and Vietnam in the 17th century. We have also confirmed that coins were used for purposes unrelated to economic use, such as for ornamental purposes in Sakhalin. Results from the study of historical documents include the following:

- Historical records concerning the *Kurosaki* mint were discovered.
- A clearer picture of the minting process in the early period of the *Kokura-han* have been found from the Hosokawa family records.
- Details of the production and control of *Yamada-hagaki*.

In addition, we have built a database on Japanese coin collections held at several foreign institutions. We have also published in the UK a catalogue entitled “The Japanese Coin Collection (Pre-Meiji) at the British Museum” (British Museum Research Publication no. 174). Members of our research team have also presented at various international academic conferences, introducing our findings to an English-speaking audience. Finally, metallurgic analysis of early stage *Kan'ei Tsubo* has shown the coins contained high levels of arsenical copper, a feature of coins from the early *Kinsei* period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2009年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2010年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2011年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
総計	14,800,000	4,440,000	19,240,000

研究分野：経済学

科研費の分科・細目：経済史

キーワード：寛永通寶、貨幣考古学、出土銭貨、海域アジア、金属組成、データベース、復元実験、共時性、広域流通圏

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 近世に、金貨・銀貨の登場後も本位貨幣として機能し続けた銭貨の発行目的や存在意義の解明が十分ではない。

(2) 寛永通寶に代表される日本近世銭貨は、管理体制の弱い請負生産であったため史料の残りが悪く、未解明な部分が多い。古銭学的に分類された寛永通寶ごとの鑄造場所、鑄造量、銭貨流通圏の形成などは定かでない。

(3) 中国やベトナムでも寛永通寶の出土例は存在するが、出土地点や数量把握など考古学的研究はなされていない。円形方孔の銭貨が流通している共通性を有する東アジア社会で、日本のみを対象地域とした視座では、寛永通寶や金属原材料の動態を把握できない。

(4) 遺跡から個別に出土する寛永通寶について、出土銭貨データベースが存在せず、研究資料としては取り扱いが難しい。

(5) 新たな文献史料の博捜し、文献史学と考

古学の研究成果を結びつけ、銭貨の金属組成分析など自然科学系諸学問との学際研究をおこなう必要がある。

#### 2. 研究の目的

(1) 考古資料や文献史料などの諸史料を駆使し、日本近世幣制の成立過程に重点を置きながら、銭貨の生産と流通の実態を解明することにより、近世幣制の中で果たした銭貨の役割を明らかにする。

(2) 共時性をもつ中国・朝鮮・ベトナムの銭貨流通のあり方を把握し、国家間交易による銭貨および金属原材料の動態を広域経済圏の中で位置づけて考察する。

(3) 作成した出土銭貨データベースなど研究成果の一部については、グローバルネットワーク構築による情報の共有を目指す。

#### 3. 研究の方法

①日本については考古資料班・文献史料

班・貨幣理論班、②海外調査班は中国・韓国・ベトナム、③両班を結ぶ形で交易班・文化財科学班・データサイエンス班にメンバーを分け、それぞれの班が組織としてのまとまりと相互の連携を保ちながら、設定した研究テーマに取り組む。また、海外協力者の援助を受け、全国組織の出土銭貨研究会を活用し、データ収集や研究成果の発表をおこなう。国際学会や研究会を通して、問題意識の共有と研究成果の公表に努める。

考古資料班はおもに寛永通寶の鑄造地を調査し、銭貨生産という側面に主眼を置いた研究をおこなう。文献史料班は各地の史料館で文献の博捜や、日本銀行が所有する史料類の再調査により研究を深化させる。銭貨の金属組成については、ICP-AES法と蛍光X線分析法を適宜使い分け、分析試料数を増やしていく。

#### 4. 研究成果

##### (1) 黒崎鑄銭場遺跡について

近世初頭の黒崎鑄銭場出土銭貨生産関連遺物の調査・研究から、新たな重要な知見を得た。この遺跡の時期は寛永通寶鑄造直前の17世紀初頭であり、砲弾型坩堝とその底部に銭貨のスタンプがあるものが出土、出土した鑄棹の断面が三角形である、作業場の規模などが岡山の古寛永通寶鑄造遺跡と同様であるなど、近世初期の銭貨生産に関する考古学的研究が進展した。金属学的特徴として、ヒ素銅を使用していたことを生産遺跡から確認できたは重要な成果である。

##### (2) 考古学的国内調査について

①福岡市埋蔵文化財センター収蔵博多遺跡群出土銭貨の実見全点調査を終え、個別出土銭のデータベース化を作成している。

②宮崎県総合博物館が所蔵している五ヶ瀬町坂本城出土一括銭の分類・整理作業をおこない、金属の組成分析以外は完了した。

③函館市湧元出土一括銭や留萌市で出土寛永通寶の調査をおこなった。サハリンや蝦夷地における出土寛永通寶から、経済的な目的で使用されていたもの以外に、装飾用のものが存在することを確認できた。

以上の調査は、個別出土銭・一括出土銭の実見調査と出土銭貨データベースの整備という観点からの成果である。

⑤京都左京八条四坊で出土した寛永通寶の砥石や坩堝など鑄造関連遺物の調査から、近世の銭貨生産は共通する技術でおこなわれていたことが確認できた。

##### (3) 海外調査について

①ベトナムにおける寛永通寶を含んだ一括出土銭など複数の資料を、ハノイ国家大学の協力を得て現地で調査した。これらの調査結果から、ベトナムにおける流通銭貨の重層性や日越交流が明らかになった。

この一連の調査結果から見えてくる東アジア規模での銭貨動態をまとめると、15世紀後半以前は中国からベトナムや日本へ北宋銭を主体とする銭貨が動いており、中国の周辺国家で銭貨鑄造がおこなわれてはいるものの定着していない。それが、15世紀後半になると中国からの銭貨流入が鈍ったため、ベトナムでは自国の銭貨が発行され流通するようになる。それに伴って私鑄銭も横行し、貨幣経済の浸透とともに通貨使用が混乱したものと思われる。15世紀末以降はベトナムでも撰銭がみられ、中国や日本での撰銭現象と共時性をもつと考えられる。16世紀になると日本での出土例から、わずかながらベトナム銭貨の日本への流入を確認できる。さらに17世紀になると、逆に日本から中国・ベトナムへと銭貨が移動することを、寛永通寶・長

崎貿易銭の出土例から確認できた。

②パリ国立図書館所蔵日本貨幣の全点調査をおこない、現地のできる作業は完了し、報告書作成作業をおこなっている。

③ドイツのイエナ大学に赴き、所蔵日本貨幣の実見調査を実施した。ここでは、黒崎鑄銭場で鑄造されていたと記録に見える「元通国吉」銘の銭貨を実見した。

④韓国の昌原では、日本の寛永通寶と並行期に流通していた常平通寶の鑄造遺跡が調査されており、鑄造関連遺物や遺構の出土から、今後鑄造技術などの日韓比較が可能な状態になりつつあることを確認した。

#### (4) 文献史料について

小倉細川氏、毛利氏、鍋島氏、島津氏の西南日本の諸大名が領国銭貨を発行・流通させていたことは文献的に確認できている。黒田氏の鑄銭が黒崎鑄銭場の本格的な発掘調査によって比較的大規模であることが明らかになり、「小河資料」という黒田領内で「新銭」の流通を命じた法令を見つけ出し、文献上で痕跡を確認できた。

古銭から寛永通寶への流通銭貨の急速な交替は、街道筋を中心とした支払手段の標準化との関係であると理解できる。

寛永通寶の公鑄に先行するプレ寛永通寶の実在については、「江戸銭」と呼ばれるものが存在することから、家光上洛に合わせて銭が新鑄された可能性が高い。

寛永通寶の公鑄を可能にした銭の大量鑄造技術は、それ以前から西南日本の大名領において見られた。慶長期後半から上方でも生産されたのではないかと考えられる。その技術は中世日本とは大いに格差があり、その起源は中国か朝鮮ではないかと思われる。

文銭については、鑄造の政治的・経済的契機をはっきりさせる必要がある。将軍の日光社参や上洛など後代の例から類推して、寛文

3年家綱の日光社参が有力である。

東アジアの銭貨の共時性を論ずるために、国内にあつては銅貿易をめぐる幕府上層部の意向、長崎の上層町人や長崎奉行の意思、変化する銅輸出業者の動向を軸に議論を組み立て、対外的には「鎖国」のもと銅の国際価格の変化を考慮しておく必要がある。

#### (5) 復元実験について

銭貨生産の実態理解のため、寛永通寶の復元実験をおこなった。金工職人の指導により2基の溶解炉を作り、銭貨を製作した。初期の寛永通寶には砒素が多く含まれるなど、これまでに蓄積した組成分析の測定データから9種類のグループ作り、一つの鑄型から5枚の枝銭ができるようにして、それぞれの発色や鑄上がりの違いを確認した。

復元した寛永通寶の枝銭を解体し、蛍光X線による再度の金属組成分析をおこなった。結果、復元実験では炉の温度が高すぎ、金属の一部が気化して、当初配合した比率になっていないことが判明した。

#### (6) 成果の公表

##### ①国際学会での報告

イタリアでの国際学会EAJS(European Association for Japanese Studies)で、「近世日本の貨幣事情」に関するセッションを組み、「近世の出土銭貨」と「旅にまつわる貨幣使用」を英語で報告した。グラスゴー大学で開催されたINC(International Numismatic Congress)で「Numismatic Research in Japan today」と題してセッションを組み、「An Archaeological Perspective on Pre-modern Japanese Coinage」「Paper Money in Early-modern Japan」を報告した。エストニアのタリン大学で開催されたEAJSでは、パネル「The Shortage of Coins in Early-Modern and Modern Japan: Toward an

Explanation for the Structural Contradictions」の報告をおこない、これまでに蓄積してきた諸史料を駆使した日本貨幣史研究の成果を披露した。交易班の島田竜登もオランダの世界経済史学会で報告をおこなうなど、各地の研究会で東インド会社を中心とした交易に関する研究報告を多数おこなった。フランス人研究者フランソワ・ティエリー氏を招聘し、国際シンポジウムを下関で開催した。氏の表題は「フランス国立図書館所蔵の寛永通寶の整理・同定の難しさ」で、外国人研究者にとって日本貨幣の取り扱いが難しいことを報告した。

## ②データベースの公開

データベースの公開については、下関市立大学のホームページにリンクさせた櫻木研究室のホームページを作成し、構築中の出土銭貨データベースを順次公開できる環境を作った。

出版した大英博物館所蔵日本貨幣カタログには、全点データや日本貨幣略史を英文で収録しており、外国人の日本貨幣史研究に対する啓蒙的役割を果たすものと思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 28 件)

- ① 加藤慶一郎、近世後期近代移行期における播州三木町の通貨構造、流通科学大学論集—流通・経営編、査読無、24、2011、pp. 168-189
- ② Ryuto Shimada、Dutch Commercial Networks in Asia in Transition toward the Age of the Pax-Britannica, 1740-1830, *The East Asian Journal of British History*、査読有、1、2011、pp. 29-40
- ③ 島田竜登、近世長崎貿易の世界史的考察—長崎との貿易ルートを中心として—、文明研究・九州、査読有、5、2011、pp. 11-20
- ④ 櫻木晋一・大内俊二、長府博物館所蔵貨幣のデータベース化、地域共創センター年報、査読無、Vol. 3、2011、pp. 19-28
- ⑤ 島田竜登、18 世紀におけるオランダ東イ

ンド会社の錫貿易に関する数量的考察、西南学院大学経済学論集、査読有、44(2・3 合併号)、2010、pp. 199-223

- ⑥ 島田竜登、世界のなかの日本銅、荒野泰典、石井正敏、村井章介編、近世的世界の成熟、日本の対外関係 6、査読無、吉川弘文館、2010、pp. 305-319
- ⑦ 島田竜登、近世アジアの交易世界—オランダ東インド会社文書からの接近—、歴史と地理、査読有、634、2010、pp. 1-14
- ⑧ 勝亦貴之、享保末年における幕府米価政策と元文改鑄、日本歴史、査読有、738 号、2009、pp. 42-57
- ⑨ 三宅俊彦、東アジアの銭貨流通、東アジアの周縁世界、査読無、同成社、2009、pp. 158-171
- ⑩ 佐々木実、出土銭貨データベースの内容と公開について、出土銭貨、査読無、第 29 号、2009、pp. 85-89
- ⑪ フランソワ・ティエリー(中島圭一・阿部百里子訳)、黎朝(1428-1789)下のベトナムにおける銭貨流通、出土銭貨、査読無、第 29 号、2009、pp. 54-72
- ⑫ Shinichi Sakuraki、New Developments in Japanese Numismatic History、査読有、*A Survey of Numismatic Research 2002-2007*、2009、pp. 578-581
- ⑬ 大内俊二・廣木由美子、一括出土銭の法量の統計学的考察、昭和女子大学国際文化研究所紀要、査読無、Vol. 12、2009、pp. 193-204
- ⑭ 櫻木晋一・大内俊二、フィッツウイリアム博物館所蔵ベトナム貨幣について、出土銭貨、査読無、第 28 号、2008、pp. 46-56

[学会発表] (計 35 件)

- ① 加藤慶一郎、近代移行期日本の貨幣・信用、日本金融学会 2011 年秋季大会、2011. 9. 19、近畿大学
- ② Sakuraki Shinichi、Evidence from the collection of Japanese coins in the British Museum、& Kato Keiichiro、Circulation of Securities as Medium Denomination Currency in Japan: The Gold Standard, Local Economy and Settlement, 1897-1917、The 13<sup>th</sup> International Conference of European Association for Japanese Studies、2011. 8. 28、Tallinn University, Estonia
- ③ 加藤慶一郎、近世移行期における貨幣と信用—決済の視点から—、社会経済史学会、2011. 5. 5、立教大学
- ④ 藤井典子、幕府による山田羽書の製造管理、社会経済史学会、2011. 5. 4、立教大学
- ⑤ 櫻木晋一、ハノイにおける一括出土銭調査——6 個の資料から見たベトナム銭貨

- 生産と流通——、社会経済史学会九州部会、2010.11.6、下関市立大学
- ⑥ 島田竜登、近世アジアとオランダ東インド会社、大阪歴史教育研究会大会、2010.8.9、大阪大学
- ⑦ 西本右子・石塚香織、銅銭の成分分析、日本化学会第90春季年会、2010.3.28、近畿大学
- ⑧ Shinichi Sakuraki、Panel: Numismatic Research in Japan today: Coins, paper monies and patterns of usage : An Archaeological Perspective on Pre-modern Japanese Coinage & Keiichiro Kato、Paper Money in Early-modern Japan、XIV International Numismatic Congress、3 September 2009、Glasgow, Scotland
- ⑨ Ryuto Shimada、South-East Asian Tin Production and its Export Trade in the Eighteenth Century ・ Invisible Links: Maritime Trade between Japan and India in the Early Modern Period、XVth World Economic History Congress、3 and 4 August 2009、Utrecht University、The Netherlands
- ⑩ 島田竜登、オランダ東インド会社のアジア間貿易、国際商業史研究会、2009.7.12、東京大学
- ⑪ 櫻木晋一、ベトナム一括出土銭の調査、2009年度三田史学会大会、2009.6.27、慶應義塾大学
- ⑫ 櫻木晋一・三宅俊彦、ベトナム埋蔵銭の語るもの、ニプロ貨幣論班第14回研究会、2009.6.6、東京大学
- ⑬ 廣木由美子・菊池誠一・大内俊二・櫻木晋一・三宅俊彦、ベトナム北部一括出土銭の研究——景興通寶の分類を中心に——、日本考古学協会第75回総会、2009.5.31、早稲田大学
- ⑭ Shinichi Sakuraki、What Coin Finds Tell Us about Currency and the Use of Money in the Edo Period & Keiichiro Kato、Money and Travel in Premodern Japan European Association for Japanese Studies、2008.9.23、Lecce, Italy
- ⑮ 島田竜登「環シナ海と銭貨——近世期東・東南アジア通商圏における小額貨幣——」出土銭貨研究会第15回研究大会、2008.11.1、沖縄県立博物館

[図書] (計 5 件)

- ① 藤井典子、日本銀行金融研究所貨幣博物館、山田羽書関係史料—天保期 溜羽書対策の記録—、2012、59
- ② 千枝大志、松坂市立歴史民俗資料館、藩札と羽書—松阪のエコマネ—、2011、63
- ③ Shinichi Sakuraki、他、British Museum、

A Catalogue of the Japanese Coin Collection(pre-Meiji) at the British Museum、2010、218

- ④ 櫻木晋一、慶應義塾大学出版会、貨幣考古学序説、2009、314
- ⑤ 谷川章雄・櫻木晋一・小林義孝、高志書院、六道銭の考古学、2009、266

[その他]

ホームページ等

<http://www.shimonoseki-cu.ac.jp/~sakuraki/coin/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

櫻木 晋一 (SAKURAKI SHINICHI)  
下関市立大学・経済学部・教授  
研究者番号：00259681

### (2) 研究分担者

加藤 慶一郎 (KATO KEIICHIRO)  
流通科学大学・商学部・教授  
研究者番号：60267862  
島田 竜登 (SHIMADA RYUTO)  
西南学院大学・経済学部・准教授  
研究者番号：80435106  
藤田 晴啓 (FUJITA HARU)  
東洋大学・国際地域学部・教授  
研究者番号：40366513  
西本 右子 (NISHIMOTO YUKO)  
神奈川大学・理学部・准教授  
研究者番号：70241114  
道盛 誠一 (MICHIMORI SEIICHI)  
下関市立大学・経済学部・教授  
研究者番号：60200052  
大内 俊二 (OUCHI SYUNJI)  
下関市立大学・経済学部・教授  
研究者番号：00113629  
佐々木 実 (SASAKI MINORU)  
下関市立大学・経済学部・准教授  
研究者番号：00235277

(H21 に加わる)

### (3) 連携研究者

三宅 俊彦 (MIYAKE TOSHIHIKO)  
専修大学・兼任講師  
研究者番号：90424324  
阿部百里子 (ABE YURIKO)  
昭和女子大学・国際文化研究所  
研究者番号：50445615  
石神裕之 (ISHIGAMI HIROYUKI)  
慶應義塾大学・文学部・准教授  
研究者番号：10458929